

1 知に関わる日本語表現

2、知の分類

3、「知識」(命題知)をどう定義するか？

(1) JTB とゲティア問題

■伝統的な知識の定義：

S が P を知っているとは、次のときそのときに限る。

①P が、真である。

②S は、P を信じている。

③S は、P を信じることに、正当化されている。

知識とは、「正当化された真なる信念」(Justified True Belief, JTB)である。

■ゲティアによる反例

(2) 知識の因果説

知識の因果説による知識の定義は、伝統的な定義に次の条件を加える

④「S が p を知っているとは、事実 p が適切な仕方で、S の信念 p と因果的に結合しているとき、そのときに限る。」

S knows that p, if and only if the fact p is causally connected in an “appropriate” way with S’s believing p.

(3) 逸脱因果の事例

先週ここまで

(4) ドレツキによる逸脱因果の問題の解決

1971年にフレッド・ドレツキが提案した解決は、伝統的定義に次の④を付け加えるものだった。

S が P を知っているとは、次のときそのときに限る。

①P が、真である。

②S は、P を信じている。

③S は、P を信じることに、正当化されている。

④S が P ということを信じるためにもっている理由 R が、次の条件を満たす。すなわち、もし現実の事態が P でなかったなら、S は R をもたなかつたろう。

(戸田山、前掲書、p.64 からの書き換え)

Fred Dretske, 'Conclusive Reasons', *Australasian Journal of Philosophy*, 49, 1971.

Fred Dretske, *Knowledge and the Flow of Information*, Basil Blackwell, 1981.

これによって、ゲティアの反例は、知識から除外される。また、知識の因果説の欠点の逸脱因果のケースを知識から除外することができる。

< (正当化の) 外在主義 >

ゴールドマンやドレツキは、真なる信念の正当化のためには、適切な仕方で因果関係が存在することが必要だと考えていた。事実 p によって信念 p が生じること、あるいは、事実 p が成立しないことによって、信念 p が成立しないこと、というような因果関係である。このような因果関係は心の外部にあり、我々が常にそれに気づいているとは限らない。真なる信念は正当化されていなければならないが、その正当化は客観的に成立していればよく、知られている必要はないと考える立場を「外在主義」という。

(5) 内在主義 vs 外在主義

(From 'Internalism and Externalism' in Wikipedia)

< 認識の正当化の内在主義 Internalism >

正当化の内在主義は、信念の正当化が、信念者に内在することを要求する。アクセス内在主義と存在論的内在主義に分かれる。

アクセス内在主義は、p を信じるのが正当化されるために、信念 p を正当化するものに、内的アクセスを持つことを要求する。アクセス内在主義者は、信念者が彼女の信念 p を合理的なものにするある事実に気づいていることをもとめる。少なくとも、アクセス内在主義は、信念者が、信念を正当化するものへの気づきをもつことを要求する。

存在論的内在主義は、信念の正当化が心的状態によって設定されるという見解である。存在論的内在主義は、アクセス内在主義とは異なりうるが、しかし二つはしばしば一緒に考えられる。というのも、私たちは、心的状態への反省的アクセスを持つ能力があると一般にみなされているからである。[存在論的内在主義では、信念の正当化は心的状態によって設定されているとしても、それが意識されていなくもよいことになる。]

< 認識の正当化の外在主義 Externalism >

正当化の外在主義的見解は、20世紀後半に生まれた。正当化の外在主義的構想は、信念者に外在的な事実が、信念の正当化として役立つ、と主張する。外在主義者によれば、信念者は、信念を正当化する事実ないし理由の認知的な把握ないし内的なアクセスを持つ必要がない。正当化についての外在主義的評価は、アクセス内在主義と対照的である。外在主義は、ある人の信念の正当化が、行為者の主観的気づきにたいして全く外在的である事実から生じるとしゅちようする。

< 信頼主義 [reliabilism](#) >

信頼主義とは、外在主義の認識論の一種である。ゴールドマン [Alvin Goldman](#) は、論文“*What is Justified Belief?*”の中で、信頼主義を次のように特徴づける。

「S がtにpを信じることが、信頼できる認知的信念形成プロセスから帰結するなら、S のtにおけるpへの信念は、正当化されている。」

ゴールドマンは、一般的にあって、信頼できる信念形成プロセスが、真なる信念を作り出すものであることに注意する。信頼主義の独特な帰結の一つは、人は正当化されていると知らずに正当化された信念を持つことがある、ということである。私たちは、どの認知プロセスが信頼可能であるかを知らない。したがって、信頼主義者は、私たちの信念が正当化されているかどうか、私たちが常に知っているわけではないことをみとめる。

Wiki からの引用、ここまで

真なる信念が知識となるためには、正当化されている必要があるが、人は、その正当化を説明できなくても、また正当化に気づいていなくても、正当化されていれば、知識を持っていると考えるのが、外在主義である。

(7) 内在主義対外在主義を超えて (ロバート・ブランダム)

例えば、盲視、フラッシュ計算、ひよこの雄雌判定、などの場合：

例えば、「は」と「が」の使い分けについて、私たちは、規則に従っているがその規則を明示化できないので、その使用は正当化できているのだが、その理由を説明できない場合：

これらの例は、ある人の判断を信頼できるが、しかしその人自身は、正当化を説明できない場合である。しかし、信頼できる弁別的反応を行えるなら、その時の信念は知識だといえるだろう。

私たちは、多くの弁別反応を信頼して、それにもとづく知識を認めている。その場合、その多くについては、その弁別反応の結果を、どのようにして正当化できるのかを示すことができない。例えば、TV のニュースを信用しているが、多くの場合、個々のニュースの正しさを正当化する理由を示すことができない。感覚、記憶、伝聞、などによる信念を信頼しているが、それらを正当化する理由を知らないことがおおい。(したがって内在主義はとれない。)

しかし、信頼できる弁別反応があるというだけで、それらが正当化されていると見なすのではない。なぜ信頼できる弁別反応があるのかわからないとしても、あるいはわかる必要がないとしても、それが信頼できる弁別反応であることの気づきや正当化が必要であろう。さもなければ、そこから知識をえることはできない。弁別反応(によって生じる信念)について、そこから何が帰結し、何が帰結しないか、それが何と両立し、何と両立しないか、などを推論できるので、それらの信念が知識とみなされるのである。それらが知識になるのは、それらが信頼できる弁別反応から生じたからだけでなく、それらが問いに対する答えとして生じているからである。その信念が<理由を与え求める>言語ゲームの中に入ることによってそれは知識となるのである。

信念も知識も、因果関係だけで生じるのではない。問いが与えられたときにそれに対する答えとして生じる。問われたときに、信頼できる弁別反応にもとづいて、ある命題を答えとして選ぶことは、合理的なことであり、その答えは合理的な答えであるだろう。

(8) Knowledge-first epistemology と文脈主義

「知識」の定義はできないという尤もらしく見える二種類の主張がある。しかし、この二つは両立しない。

<知識ファースト認識論> (Knowledge-first epistemology)

Belief-first epistemology: 知識を信念から説明しようとする。

Knowledge-first epistemology: 知識を basic で分析できないものとみなす。知識から他の factive verbs を説明しようとする立場である。

Timothy Williamson

知識 = 最も一般的な factive mental state

他の factive verbs (seeing, being aware of, remember) の中に含まれている。

Other factive verb is a specific way of knowing.

Seeing = knowing through vision

Remembering = knowing through memory

他の factive verbs は、知識を要素して説明される。

<文脈主義> (Contextualism)

「知る」という語の意味は、文脈によってことなる。

例えば、哲学では、非常に厳密に理解し、日常生活ではルーズにもちいる。

例えば、「あなたは明日の飛行機の予約ができていますか？」

と問われて、通常ならば「はい」と答えるが、しかし明日非常に重要な仕事があるとすると、その飛行機の予約を確かめなければ、「知っている」とはいえないと感じるかもしれない。

「知識」はその意味で多義的なものだから、「知識」の一つの定義を求めることはできない。

この二つは矛盾する

文脈主義は、知るが factive verb であることと矛盾する。

P がある文脈では知識となり、ある文脈では知識ではないことになる。

これは、知識が factive verb であることと矛盾する。

=====

ミニレポート課題

- 1、信頼できる弁別的反応の例を挙げてください。
- 2、文脈主義と、「知る」が factive verb であることの矛盾をどう解決しますか？
- 3、今日の講義内容に関連して、できるだけ根源的な哲学的な問いを立ててください。
- 4、先週皆さんが挙げた逸脱因果の事例を、ドレッキの第4の条件で排除できるかどうかを検討してください。

④S が P ということを信じるためにもっている理由 R が、
次の条件を満たす。すなわち、もし現実の事態が P で

なかったなら、SはRをもたなかっただろう。

=====